

# 小学校国語科における新聞活動の再構築

櫻 本 明 美

## 1 問題の所在

平成20年2月15日、文部科学省が学習指導要領の改訂案を発表した。そのポイントの一つに、言語活動の充実が挙げられる。その言語活動の中でも、いわゆる PISA 型読解力は、「自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力」と定義される。このような読解力を育成するための具体的な方法を開発することは、これからの課題である。

とはいえ、この課題に迫るための実践も徐々に試みが重ねられているところである。その有効性が確かめられたという実践の一つに、新聞を活用した例がある。それは、『『活用』力の高い学校 ここが違う授業、運営』（日本教育新聞 平成20年2月18日付）に紹介されたものである。仙台市立五橋中学校では、先の文部科学省が実施した平成19年度全国学力・学習状況調査の結果で、『国語B』を中心に「基礎・基本的な知識・技能よりも、主として活用する力に成果を残した」という。「どんな指導が成果を上げたのかは断言できない」としつつも、成果の要因の一つに NIE に力を注いできたことを挙げている。確かに、教育課程部会における審議の概要報告書の中にも、言語活動の充実に向けて、特に留意すべき点として「言語に関する能力の育成に当たっては、辞書、新聞の活用や図書館の利用などについて指導し、子どもたちがこれらを通して更に情報を得、思考を深めることが重要である。また、様々なメディアの働きを理解し、適切に利用する能力を高めることも必要である」<sup>1)</sup>とあり、これからの国語科学習に「新聞の活用」への着眼が示されている。

上記の動向を踏まえ、本研究は、これまでの国語科における新聞教育の取り組みを「情報活用力の育成」の観点から見直す。その際、小学校における新聞活動に対象をしぼる。そうして国語力を高めるため、とりわけいま求められている PISA 型読解力の育成を視野に入れて、新聞活動の有効性を確かめ、今後の国語科の実践課題に応える授業を拓くための拠り所を得ようとするものである。

## 2 小学校における新聞活動の種類

小学校における新聞活動の実践は、その活動内容によって、大きくは、次の2類型としてとらえることができる。

- |                                |
|--------------------------------|
| a 児童による新聞づくり                   |
| b 学習活動における一般新聞の記事などの活用（NIEを含む） |

aは、次のア～エのような新聞をつくる活動であるが、自分たちでそれを読み合ったり、時には学校外の人たちにも発信したりする活動を伴うものである。

ア 個人新聞（自分新聞）    イ 班新聞    ウ 学級新聞    エ 学校新聞

アやイなどは、作成したものを綴じ合わせて回覧できるようにすることがよくある。また、イ、ウ、エは、印刷して配布できるようにしたり、模造紙などに書いて掲示する「壁新聞」とよばれる形のものであったりする。

bは、新聞を教育に活用するものである。これには「NIEを含む」としている。NIEとは、Newspaper in Educationの略称である。日本新聞協会では、「教育に新聞を」と訳している。この活動が一般的にいう新聞活用の学習と決定的に違うところは、「NIEでは、新聞側と教育側が連携し、組織的に新聞を授業で活用していこうというところにある」<sup>2)</sup>とする。具体的には、NIEでは、「新聞側が無料で新聞を提供するほか、記者によるオリエンテーションとか、新聞社の見学を優先的に行うとか」<sup>3)</sup>という方法が取られている。新聞記事を学習に活用することは、すでに明治の頃から取り入れられていたということである。しかし、NIEに関しては、導入されたのが1980年代後半であり、実践としては、まだ日が浅い。

## 3 新聞活動の意義

昭和63年8月、全国新聞教育研究会のOB会として発足した「新友会パピルス」が、その事業の一環として、『新聞教育の歩み 全新研を育てた人たち』（平成7年7月7日 新友会パピルス）を発刊している。そこには、新聞教育について、会の胎動期の様子が次のように述べられている。

昭和二十二年、敗戦の廃墟と飢餓の中に、教育の民主化が叫ばれ、新制中学校が装いも新たに誕生。小学校との九ヶ年の義務教育制に教育内容も大きく変化した。現場では、教育の内容、方法等に迷いがあったとはいえ、教師の自由な発想、創意・工夫がなされた時代であった。…中略…とりわけ、教科外活動が模索の段階であった。

こんな中、子どもたちの新聞づくりがさかんになり、ものの見方、考え方が育ち、生きいきとしたその姿に、教師は感動し、“新しい教育”の一つとして育成しようとする意気

ごみが、現場教師の中に生まれてきたといえよう。<sup>4)</sup>

ここには、新聞づくりの活動を教育に位置付けることの価値が「ものの見方、考え方が育つ」ことと、子どもたちが「生き生きとした」姿で取り組むということにあるとしている。その後、昭和33年8月2日、全国中学校新聞教育研究協議会が結成されるに至っている。小・中の研究会が全国新聞教育研究協議会（以下、「全新研」と略称）として統合されたのは、4年後の昭和37年である。以後、共通のテーマを掲げて年に1回の研究大会で実践研究を交流し学びあうことになる。

そこで、新聞活動の意義を確認するために、小・中統合以降の大会テーマも振り返り、小学校における新聞教育がめざしてきたものを取り出してみることが有効ではないかと考える。次に挙げるのは、全新研大会に小学校が加わった昭和37年第5回大会から平成7年第38回大会までのテーマを整理し、まとめたものである。<sup>5)</sup>

- ① 効果的な新聞教育をどう実践しているか（昭和37～42年）
  - ・能率的・自主的な新聞づくりとその活用
  - ・学校新聞，学級新聞，壁新聞づくりとその活用
  - ・学校生活の向上をめざして
- ② 新聞教育の評価をどうすすめるか（昭和43～51年）
  - ・学級経営の中で
  - ・学習指導および生活指導面で
  - ・新聞の作成と活用における実践活動
  - ・学校教育の現代化と新聞学習
  - ・仲間づくりを推し進めるための新聞づくり
  - ・教育効果を高めるための新聞教育をめざして
  - ・ひとりひとりを生かす活動の進め方
- ③ 新聞教育の原点と未来をさぐる（昭和52～53年）
- ④ 集団を育てる新聞教育をどのように進めるか（昭和54年，56年）
- ⑤ 自主性，積極性，創造性を育てる新聞教育の進め方（昭和55年，57～58年）
- ⑥ 人間性を高める新聞活動を（昭和59年）
- ⑦ 豊かな心を育てる新聞づくりの進め方（昭和60年）
- ⑧ 教育活動をもり上げる新聞教育の実践（昭和61年）
- ⑨ 新聞教育の新たな展開を求めて（昭和62年）
- ⑩ 集団を高め人間性豊かな子どもを育てる新聞教育の進め方（昭和63年，平成元年）
- ⑪ 情報の送り手と受け手の立場から公正な判断力の育成を目指した新聞教育の在り方を求めて（平成2年）
- ⑫ 21世紀を切り開く子どもを育てる新聞教育をめざして（平成3年）

- ⑬ 新聞教育を教育計画にどのように取り入れるか（平成4年）
- ⑭ 新聞を教育にどのように生かすか（平成5年）
- ⑮ 新聞で自ら学ぶ力をどう育てるか（平成6～7年）

上記の内容を踏まえると、「ものの見方，考え方を育み，主体的な生活者に」という新聞教育の理念のもとに，小学校段階における新聞活動の教育的意義を，改めて次の6点にしぼってとらえることができる。

- ア 学校・学級における生活向上への意識を高めること
- イ 個を生かし，集団づくりを推進すること
- ウ 児童の自主性，積極性，創造性を育てること
- エ 豊かな心を育むこと
- オ 自ら学ぶ力を育てること
- カ 情報の送り手と受け手の立場から公正な判断力を育てること

このような意義は，現在も実践の中に確かに継承されている。

たとえば，平成17年度開催の全新研大会で発表された実践「卒業文集を新聞形式で書こう」（大阪市立北中道小学校 井上博之教諭）には，次のような指導者の意図があったという。

毎日の自分の学校生活をじっくりと振り返り，それを改めて文章化することで，自分自身を見つめなおす場を設定したいと考えた。…中略…一ヵ月間の自分の学校生活を「自分新聞」という形でまとめることにした。一ヵ月間の自分の学校生活を振り返ることで，児童は，自分の成長やがんばりを再確認することができ，学校生活をより意義のあるものにすることができた。<sup>6)</sup>

この実践で作られた「卒業新聞」は，さらにその「自由新聞」を集大成したものである。

井上実践の意義を上記のア～カの項目に照らしてみると，カ以外のア～オすべての項目にあてはまる。また，井上教諭が所属する大阪府・市小学校新聞教育研究会の平成17・18年度研究テーマについて見てみると，研究目標として「人間性豊かな子どもの育成や集団を育成する新聞教育」が謳われている。<sup>7)</sup>

「カ 情報の送り手と受けての立場から公正な判断力を育てること」については，主に類型bに該当する実践（後述4(3)を参照）によって具現されることになる。

#### 4 国語科における新聞活動の位置と実践事例

前項3において見てきたような意義をもつ新聞活動は，国語科学習に生かすことのできるものである。なぜなら，国語科で育てる力と新聞活動とは，緊密にかかわっているからである。特に，はじめに述べた「情報の活用力の育成」が効果的にできる可能性を秘めている。

そうした活動が、実践者の個人的な工夫にとどまらないものとするためには、国語科の教育課程に位置づけられている必要がある。ここで、その点について、確かめる。それに加えて、位置づけに沿った実践事例の概略とその活動をとおして育つ言語能力を明らかにする。

### (1) 学習指導要領「国語」に例示された新聞活動

現行の学習指導要領の解説には、次のように新聞づくりが第3学年及び第4学年における言語活動例の一つとして取り上げられている。

「相手や目的に応じ、調べた事などが伝わるように」表現できる文章表現力を重視したい。そのためには読む相手や書く目的を具体的に設定し、伝えたい事柄の中心を明確にする構成を工夫できるよう指導することが基本となる。…中略…手紙文を書いたり、発表の場を想定して記録文や学級新聞を書いたりするなど、読み手や書く目的を具体的に意識して書く活動を展開できるようにする必要がある。…中略…

学級新聞などを書く場合、見出しを付けたり記事を書いたり、割り付けをしたりするといった学習が考えられる。このような学習は、中心を明確にしながら書くことや、段落相互の関係を考えることなどとの関連が深い。<sup>8)</sup>（下線は引用者による）

このように、中学年において主に「類型a 新聞づくり」を位置づけ、その活動をとおして言語技能が習得できるよう促している。

### (2) 国語科教科書教材に位置づけられている場合の事例

実際、教科書には、学習指導要領の前記内容を踏まえた教材が配列されている。たとえば、単元「自分新聞を作ろうー伝えたいことを分かりやすく記事に書きましょうー」（東京書籍4年上 平成17年度版）では、「自分新聞」を作る過程を具体的に示し、さらに新聞記事の特徴や割り付けのしかた、見出しやリード文の書き方などにも目を向けさせ、実作へとつなげていくよう構成されている。

この学習を教材の促しに即して展開すれば、新聞の作り方や基礎・基本の言語技能が習得されることになる。これは、類型aに該当するものとみることができる。また、「新聞を読み合おう」として、「新聞を作った人あてに、読んだ感想や、聞いてみたいと思ったことを書いてわたし『投書箱』を作ってもいいですね。」とある。これは、作ったものの相互評価活動の具体的な方法の示唆となっている。それと同時に、活動類型bへの橋渡しとしても有効な活動と考えられる。

### (3) 一般新聞の記事などの国語科学習への活用事例

一般新聞の記事などが授業者による国語科教材開発の素材として活用されることは、かなり浸透しているようである。それを活用した実践事例は少なくない。これらは、活動類型bに該

当する。具体的には、たとえば次のようなものである。(よく実践されている活動として、アウトラインのみを示すにとどめる。)

- 漢字学習に…たとえば、新出漢字の読み書きを指導したあと、その漢字について、新聞紙面に使われている言葉を見つけて抜き出す。学習した漢字が実際にどのように使われているのかを調べ、その定着を効果的に図ろうとするものである。
- スピーチや意見文を書くためのテーマとして…「話すこと、聞くこと」の学習におけるスピーチの素材にする。あるいは、「意見文を書く」という「書くこと」の単元で、新聞記事の中から気になる記事を取り出して、自分の意見を書く。また、同じ話題でも新聞ごとに記事文や使われている写真などが違っている。この点に着目させて読み比べたうえ、自分の意見をスピーチにしたり意見文に書いたりする。自分の考えを表現する力の育成をねらったことである。また、読み比べは、メディア・リテラシーにもつながる。
- 調べ学習の資料として…「読むこと」の学習で、説明文教材を読み広げたり考えを深めたりするための資料収集に活かす。この活動をとおして、情報の収集・選択力などが育つ。
- 4コマ漫画を表現学習に…新聞にある4コマ漫画を使って、空白になっているセリフを自分で考えたり、一連の物語に書き換えたりする。この活動は、想像力を働かせて書く文章表現力に培うものである。また、会話文の使い方について楽しく学ぶこともできる。
- 記事に添えられた写真の選択について…新聞記事には、写真が使われているものもある。それらの選択について、まず、説明的文章教材「アップとルーズで伝える」(光村図書4年下 平成17年度版)を読んで理解する。そのうえで、新聞に使われている写真のいろいろな例を取り出し、記事文との関係からみて、その写真でよく伝わること、あるいは伝わりにくい(伝わらない)ことを考え、話し合う。

なお、この学習は、さらに、自分たちの新聞づくりに取り組み、そこに写真を使った新聞記事を入れるという活動につながるような展開をとる場合がある。実際、教科書では、「アップとルーズで伝える」に続けて、「ふだん見なれている学校の中の物、ちいきにある物について、くわしく知りたいことや疑問に思うことを調べ、かべ新聞やポスターを作って、知らせましょう。だれに知らせるのかを決めて、いちばん知らせたいことは何か、相手が知りたいと思うことは何かを考えましょう。」「(四年三組から発信します)」という促しがある。これは、類型bに類型aをつなげていることになる。

この一連の活動をとおして、学習者は、情報を読み取るのに、文章だけでなく写真などの資料も読みの対象であるという意識を確かにする。さらに、情報の送り手として、写真や資料をどのように取り入れるのが効果的かということを考え、実際に効果的な表現を工夫する力を伸ばすことにつながる。

<参考> 「アップとルーズで伝える」の教材文の一部

写真にも、アップでとったものとルーズでとったものがあります。新聞を見ると、

伝えたい内容に合わせて、どちらかの写真がつかわれていることが分かります。紙面の広さによっては、それらを組み合わせることもあります。取材のときには、いろいろな角度やきょりから、多くの写真をとっています。そして、その中から目的にいちばん合うものを選んで使うようにしています。

テレビでも新聞でも、受け手が知りたいことは何か、送り手が伝えたいことは何かを考えて、アップでとるかルーズでとるかを決めたり、とったものを選んだりしているのです。

## 5 実践事例に関する考察

上記の事例は、それぞれに類似の実践例も得やすいものであり、一般化されていると見てもよいのではないだろうか。この判断に立ち、「情報活用力の育成」の観点に立って考察を加え、課題に迫る。

### (1) 情報活用力の育成について

ここでいう情報活用力とは、調査、記録、まとめ、発表、報告などの学習を展開していく過程において、「自ら情報を収集し、選択して、その質や価値を判断し、新たな情報としてまとめて発信する」という一連の学習をいう。<sup>9)</sup>

この定義に照らしてみると、新聞活動のうち類型bは、実践事例にあるとおり新聞を情報源として、調べたり、それらを使って自分の新たな情報発信につなげたりしていて、当然、情報活用力の育成につながっているものと考えられる。

この点について、藤原和博氏の次の提言は、今後の方向を探るうえで示唆に富むものである。

氏は、まず、「情報処理力」を「決められた世界観の中でゲームをするとき、いち早く『正解』を導き出すチカラである」<sup>10)</sup>と規定し、この力に加えて新たに「情報編集力」という概念を提示している。そうして、「情報処理力」と対比しながら「情報編集力」を鍛える学習指導の必要性について、次のように述べている。

「情報処理力」はいわば、ジグソーパズルを早くやり遂げる力だ。…中略…

一方、「情報編集力」は、レゴをやるときに要求される力だ。一つ一つの部品はシンプルだが、組み合わせることで、宇宙船にも家にも動物にも人の姿にもなるし、文字通り町全体をつくり出すことも可能だ。世界観自体をつくり出す力なのである。

パイが変わらない世界の中でも選択肢の幅を広げ人生を豊かに生きるには、「情報編集力」が欠かせないことは火を見るより明らかだろう。

日本の成熟社会を支える市民を誕生させるためには、学校でも「情報処理力」だけでなく「情報編集力」を鍛える学習が必要なのである。<sup>11)</sup> (下線は引用者による)

要するに、高度な情報社会にある現代において、多くの情報の中から一つの正解をより早く求めるには、機器に頼ればよい。そこでは、機器を上手に使いこなす力は必要であるが、「選択して、その質や価値を判断し、新たな情報としてまとめて発信する」という一連の活動に働く力（換言すれば「情報活用力」）が求められるわけではない。しかし、これからの社会で「人生を豊かに生きる」には、自らの判断で情報を取捨選択し、それを新たなものに創りあげていくような「情報活用力」、藤原氏の言葉を借りれば「情報編集力」が求められるということである。

## (2) 実践事例類型 a について

前述の「情報活用力」に関する意味内容を踏まえ、その観点に立って類型 a に該当する実践事例について改めて見てみる。

先の井上博之教諭の実践「卒業文集を新聞形式で書こう」は、第4学年での「自分新聞を作ろう」という教科書教材による学習の延長線上に位置付けられるものである。井上氏は、新聞形式をとる「よさ」として、次の3点を挙げている。<sup>12)</sup>

- いくつもの記事（複数の内容）を書くことができる。
- カットや図・写真などを挿入できる。
- 見出しやリード文で読み手を引き付けることができる。

氏の実践では、これらの「よさ」を生かすよう工夫し、「情報活用力」が育てられていると言える。なぜなら、情報を取捨選択したり、カットや図・写真の挿入を考えたりする際には、的確な判断力が求められる。また、見出しやリード文の工夫は、創造的な活動だからである。

ところで、PISA 型読解力の育成が課題となり、フィンランドの国語教育が注目されたことは、まだ記憶に新しい。その『フィンランド国語教科書』にも、新聞づくりに関する教材が見受けられる。小学3年生用のもので、そこには、学級新聞づくりの促しとして、「ニュース、インタビュー、最近のできごとについての記事を書こう。」とある。「新聞記者になろう」という設定で、「新聞記者の道具は、えんぴつ、紙、ろく音する機械、カメラ、コンピューターなどだよ。いつ、どこで、だれが、なぜ、何をしたのか調べよう。」と具体的な指示があり、続けて、作りあげるまでの手順が7項目にわたって示されている。<sup>13)</sup>

先に挙げた教科書教材例と比べてみると、「自分新聞」と「学級新聞」の違いはあるが、当然のことながら、手順は似通っている。ただ、そこに認められる差異に注目することで、これからの新聞づくりをとおした国語科に、次のようなヒントを得ることができる。

- ① 「記事のほかに、お知らせや、広告や、投書をのせてもいいんだよ」とある。広告をのせるということで、広告という情報に、より意識的にかかわる姿勢が育てられる。また、投書の掲載によって、新聞がコミュニケーションの場としての一役を担うという価値に気付かせられる。



② 「どうやって学級新聞を発行するのかを、考えよう。コピーして配ろうかな、それとも、売ろうかな、学校のホームページにのせようかな。」とある。これは、手順の最後(⑦)に示されていることであるが、実際の活動を考えると、むしろ最初(①)にあってもよい。それによって、読者をだれに想定し、その号のテーマや紙面の割り付けの見通しが立てられるからである。いずれにせよ、「売ろうかな」という発想に立つ実践例は、知り得た限りにおいてはあるが見受けられない。しかし、実際に「売る・売らない」はともかく、たとえば模擬的に「売る」ことを前提にしてみようと促すことは、学習者にも新たな気づきを得る契機となるのではないか。

### (3) 実践事例類型 b について

国語科学習で新聞を情報源に取り入れる実践事例をみると、概ね、この方向をめざして取り組まれていると言える。

しかし、たとえば、次のような実態から目をそらすわけにはいかない。

事実と感想を区別し、新聞記事から分かることを簡単にまとめる活動を行った。しかし、内容をそのまま書き写す児童や、記事の中からどの部分を選択していいか分からず、手が止まってしまう児童もいる。<sup>14)</sup>

そこで、授業者の工夫が必要になってくる。このような問題点を改善するために、斎藤都教諭(大阪市立淀川小学校)は、第6学年で新聞記事を活用して意見文を書く学習指導に取り組む、その工夫と成果を報告している。<sup>15)</sup> そのポイントをまとめると、次のとおりである。

<授業工夫のポイント>

- 説明的文章の読みと連続させること … 説明文教材「イースター島にはなぜ森林がないのか」(東京書籍 6年上)の読み取りで得た「人間の未来だけでなく地球そのものの未来について考えていく必要がある」という問題意識から、「地球の未来を考えよう」という課題を設定しその追求に意欲をもつようにする。
- 新聞記事の選択と書き込みによる考えの意識化 … 課題意識に沿って新聞記事を選択し切り抜き、所定の用紙(資料1を参照)に貼り、必要事項(記事へのサイドライン、感じたこと・思ったこと・疑問・さらに調べてみたいことなど)を記入することによって自分の考えを意識化し深めることにつなげる。

上記のように工夫した学習指導の結果、「資料を読むことに慣れ、『自分に必要な事柄は何か』『伝えたいことは何か』を少しずつ考えられるようになり、他の教科でも資料を活用することができるようになってきた。さらに、環境問題だけでなく様々な社会の問題にも目を向け、自分なりの考えを持つことができるようになってきた」ということである。

そうだとすれば、たとえば帯単位として「課題追求のための新聞記事切り抜きカード」活用を継続することは、有効な方法の一つと考えられる。

(資料1)

地球の未来を考えよう	
6月 22日 名前( )	
調べてみたいこと ( <u>かんきょう問題</u> について。 <u>きんでい</u> り人なはいないか。 )	
資料( <u>朝日小学生</u> ) 新聞 6月 18日発行 ( <u>目録に「ミカ」の</u> ) の資料から	
資料をはる	
(中略)	
	<p>選んだ理由</p> <p>大見出しに注目して 見ていたう、目録に「ミカ」の とまわって、とでも、 選みました。</p>
資料を読み、感じたこと・思ったこと・疑問なこと・さらに調べてみたいことなどを書こう。	
<p>公園内に <u>ゴミ箱が</u> 置いてないから、<u>ゴミ捨てする人</u>が 少ない <u>だ</u> と思います。 <u>道路も</u>、ミカが 近くに いるなら <u>飛ぶ</u> だして <u>く</u> <u>た</u> 3つと、考えられると思います。遠足で見た 元気なミカの他に、<u>こんな</u> <u>カワイ</u> <u>うな</u> ミカが いるなら、<u>と</u> 思いました。ミカを <u>守</u> るために <u>も</u> <u>ゴミ</u> <u>捨</u> てはしたら <u>ダメ</u> だ <u>と</u> 思います。</p>	

## 6 まとめと今後の課題

これまでの全新研の活動をひもとき、新聞活動の意義を確かめた。その内容を踏まえ、国語科においても、新聞活動が言語能力、特に情報活用力の育成に有効であるということを、現行の国語科教科書教材やこれまでの実践事例によって確かめることができた。

このことは、同時に、PISA型読解力の育成という課題解決にも通じるものであることも確かめられた。

今後は、これまでの実践に学びつつ、さらに次のような点に留意した新聞活動の取り入れ方を工夫することによって、いっそう有効性が高められるのではないかと考える。

- 情報の取り出しに終わらせないで、活用力を高める工夫を（たとえば「新聞の切り抜きカード」の帯単元的な取り入れ方での継続や記入内容の検討、その活用法など）

## 小学校国語科における新聞活動の再構築

- フィンランドの国語教科書における言葉「広告や投書をのせてもいい」「売ろうかな」をヒントとして、情報活用力を高めるために活動を促す工夫を

### 注

- 1) 平成19年9月25日教育課程部会（第4期第11回）配布資料による。
- 2) 小田迪夫・枝元一三『国語教育とNIE』大修館書店 1998年6月 p.2 1.15～1.16
- 3) 注2)と同書。p.2 1.1～1.2
- 4) 新友会パピルス編『新聞教育のあゆみ』1995年7月 p.19
- 5) 注4)と同書。p.64～p.66
- 6) 大阪府・市小学校新聞教育研究会『研究集録』府39・40号 市46・47号 2007年3月 p.7
- 7) 注6)と同書。「はじめに」
- 8) 文部省『小学校学習指導要領解説 国語編』東洋館出版社 平成11年5月 p.68 1.2～p.75 1.16
- 9) 小森茂・相澤秀夫・田中孝一編著『情報を活用する学習』明治図書 1999年12月 p.12 1.22～1.25
- 10) 藤原和博『新しい道徳』ちくまプリマー新書 2007年12月 p.72 1.7～1.8
- 11) 注10)と同書。 p.73 1.8～p.74 1.4
- 12) 注6)と同じ実践論文による。
- 13) 『フィンランド国語教科書 小学3年生』経済社 2006年5月 p.74
- 14) 平成19年度大阪府・市小学校新聞教育研究大会 要項所収 齋藤 都・長尾みどり「新聞作りから新聞活用学習へ 国語科6年『イースター島にはなぜ森林がないのか』の実践から」と題する発表資料による。
- 15) 注14)と同資料によりまとめたものである。なお、(資料1)も同資料にあるものを紹介させていた

(本学児童教育学科教授)